

apice rotundatum calcaratum 15-17 mm. longum; calcare breve crasso recto ca. 5 mm. longo 4 mm. lato. Antherarum nectaria anguste elliptica curvata apice rotundata 3 mm. longa. Antherae 3 mm. longae luteae connectivo apice in membranam obtusam fuscata producta. Ovarium 3 mm. longum ovoideum superne parciusculum minute papillosum. Stylus 2.5 mm. longus sursum clavato-crassatus. Stigma truncatum facie rotundatum breviter rostratum. Fructus ignoti.

Nom. Jap. Mansyû-hukisumire.

Hab. Manchuria orient. Prov. Liao-ning [遼寧省]: circa Lien-shan-kuan [連山關] (D. Simizu, Mai. 15, 1943); in umbrosis montis Ma-tien-ling [摩天嶺] (D. Simizu, Sept. 15, 1941; Mai. 14, 1943).

Area Geogr. Manchuria orient.

尚, 挿畫は清水大典氏の筆になるものである。茲に記して謝意を表する。

## ○シラカンバ と *Betula kennaica* (原 寛)

Hiroshi HARA: Japanese white birch and Kenai birch.

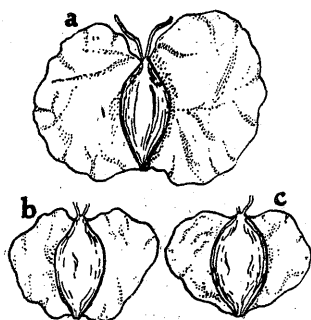
先に本誌 22 卷 185 頁でスエーデンの Lindquist 博士 (1947) が, エゾノシラカンバ (*Betula alba* var. *kamtschatica* Regel) はアラスカの *Betula kennaica* Evans (1899) と同一で, 日本のシラカンバはその變種とすべきものであるとの見解を述べている事を紹介した。

しかしこの點は再檢を要する様に思われたので, スエーデンの Hultén 博士に *B. kennaica* の標本を分與して欲しいと御願した所, 早速アラスカ産の貴重な標本, Halibut Cove, Kenai Penins. (Coville & Kearney no. 2423, Jul. 1899) 及び Kodiak (Cov. & Kearney no. 1445, Jul. 1899) の一部が送られてきた。若枝や葉下面に腺點が多い點等はなるほどシラカンバに近いが, 果穗は細く果鱗も小さく, 特に種子の翼はシラカンバより明かに小さく狭くその幅は堅果と同じか又はそれより狭い (挿圖 b, c 参照)。シラカンバでは種子の翼は堅果より遙かに大きく丈高く廣く往々 2 倍の幅に達する (挿圖 a)。果鱗も幅が廣く果穗は太い。葉の形ではシラカンバ中にも *B. kennaica* とよく似たものがあるが, *B. kennaica* の葉の先端は餘り尖らずシラカンバの様に尾狀鋭尖頭をなさない。葉形の異つているホソバシラカンバの様なものでも種子の翼の性質はシラカンバと變らない。

又 *B. kennaica* の樹皮はシラカンバの様に白くなく黒ずんでいて, はげると帶褐灰色になる。この事は *B. kennaica* の原記載にも明記され, 樹皮は rough で多少溝があり

若枝は暗赤灰色又は褐色を呈し、同地方では‘the red or black birch’と呼ばれていると書いてある。

これら *B. kenaica* の性質は、最近殆ど同時に平行して出版されつつあるアラスカの二大植物誌を見ても分る。Hult n 博士の力作 *Flora of Alaska and Yukon* 4: 576 (1944) には種子の翼は堅果とほぼ同じ幅で果穂は細く暗褐色、樹皮は暗色 (dark) であると記されている。又葉は先端餘り突出せず、上面に通常多少毛があり、下面脈腋には通常著しい腋毛がないとされている點もシラカンバとやや異つてゐる。又 Anderson 博士の *Flora of Alaska and adjacent parts of Canada* 4: 219, f. 366 (1946) には樹皮は剝落 (exfoliate) し灰白色乃至暗褐色とあり、葉は通常上面に多少毛があり、種子の翼は堅果とほぼ同じ幅であるとしている。



種子 (Seeds)  $\times$  ca. 6.  
a. Japanese white birch  
b. c. Kenai birch

以上の様に *B. kenaica* は色々の點で日本のシラカンバとはつきり異つていて、その分布もアラスカの中央部から西部、南部アラスカ半島に限られている。エゾノシラカンバはシラカンバより種子の翼がやや狭く葉は廣楔脚をなす傾向があるがシラカンバに近い形と思われる。又カラフトシラカンバは果穂が細く果鱗は小さく種子の翼が狭い點で *B. kenaica* に似てくるが、種子の翼もそれよりはやや大きく葉の先端はもつと尖る。

Lindquist 博士が日本のシラカンバをどの程度に認識しているかは疑問で、彼が *japonica* として圖示した北支山西省産のものは種子の翼がシラカ

ンバよりずつと小さく狭いものでカラフトシラカンバに近い。又小五臺山のものは歐洲の *B. verrucosa* と區別できないとも書いている。それ故彼のようにアラスカから東亞にかけて産するものが、*B. verrucosa* と別種で *B. kenaica* の下にまとめられるという説は再考を要すると思われる。シラカンバは葉の形や種子の翼が大きく樹皮の白色な點で、反つて彼が *B. verrucosa* 系としたヤクーツク、ダフリア産の *B. platyphylla* Sukatchev に近い。彼が Transbaical 産の *B. platyphylla* として圖示した種子の翼はシラカンバの様に大きくて廣い。

今後アラスカ、カムチャッカ、ダフリアに於ける本類の變化がもつとよく調べられた後でないとこれ等を別種とすべきか否かを論じても無駄であるが、今迄に私の手元にある資料では日本のシラカンバはアラスカの *B. kenaica* よりも、ダフリアの *B. platyphylla* に近いとの以前の考を變える迄に至つていない。